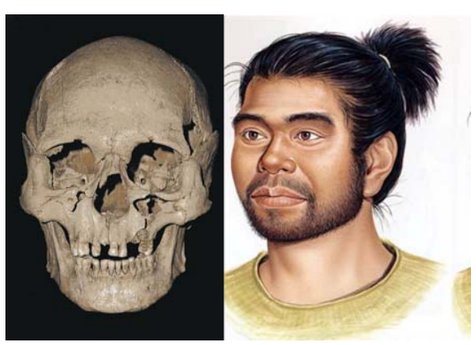
古代遺跡の人々から探る日本人のルーツ

日本列島に住んでいる人たちが、いつどこからやって来て、どのような変遷をとげてきたのか。私たちにとって極めて身近なテーマである。「日本人論」と一口に言っても、大和民族、アイヌ民族、琉球民族といった多様な民族が居住しており、その成り立ちについては、様々な学問的アプ ローチにより論じるが、各地の遺跡から発見されている人々の形態情報をもとに解説する。

1.縄文人の姿

日本全国の縄文時代の遺跡からは、たくさんの縄文人骨がみつかっており、北海道から沖縄にいたるまで、多少の地域色はあるが、ほぼ同じような顔立ちをした人々が住んでいたことがわかっている。たとえば、岩手県の宮野貝塚からみつかっている縄文時代晩期（およそ3、000～2、500年前）の男性の頭骨は、縄文人の中の縄文人といってもいいくらい、縄文人らしい特徴をもっている、現代の日本人とくらべてみると、まず頭が少し大きい。そして、顔は上下に短く寸詰まりであることがわかる。一方、頬骨は外側によく張り出しているので顔幅は広い。また、おでこから鼻にかけての部分も特徴的である。眉間はよく盛り上がっているが、その下の鼻の付け根の部分は深くくぼんでいるかと思うと、さらに下に続く鼻の骨は高くそり上がっている。凹凸の激しい顔だ。目の部分には、眼球がはいる眼窩とよばれる大きな穴があいているが、この穴の輪郭をみると横に長く角張っていることも特徴的である。実は、このような骨格の特徴は、現代のアイヌの人たちにもみられる。アイヌの人々を参考に、縄文人の顔を復元してみると、目は大きく、二重まぶた、発達した耳たぶ、男なら髭が濃かったと想像される。縄文人の顔は総じて、目鼻立ちがはっきりしていて彫りの深い顔立ちの持ち主だったといえよう。身長は男性の平均が158cm、女性が147cmほどだ。現代の私たちよりも小柄であるが、四肢骨のそれぞれの骨の形態にも現代日本人と異なる特徴がみられる。脛骨が扁平であり、大腿骨の背面の粗線と呼ばれる部分が柱状に強くでっぱっている。脛骨の扁平性は前後方向の抗力を強めるためと考えられており、大腿骨の粗線は、大腿四頭筋、大腿二頭筋、内転筋群など、大腿をとりまく多くの筋が付着する部分である、これらの筋が強く発達していることによって柱状性のでっぱりが形成される。このような形態は採集狩猟民に一般的にみられるものであり、腕や脚の筋が強く発達していたことを示す。縄文人が野山を駆け回る強い脚力や激しい漁労に耐えられる腕力をもっており、小柄ながらも狩猟や漁労に適した屈強な体格の持ち主であったといえる。



岩手県宮野貝塚の縄文人

コラム： 骨からわかる縄文人の生きざま

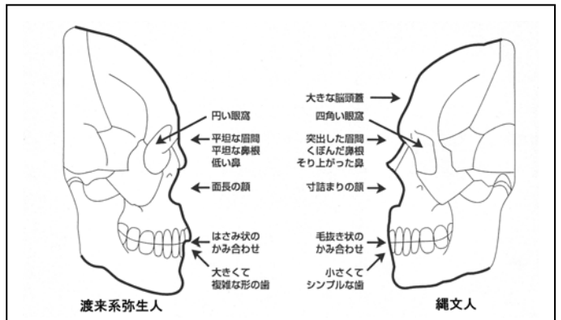
縄文人骨から得られる情報は多義にわたる。人骨の形態を調べることにより、性別、年齢、体格、死亡年齢と原因、疾病や外傷歴、出産歴、栄養状態、寿命、幼児死亡率、血縁関係、風習やある種の慣習といった個人情報やライフヒストリーをはじめ、マクロな視点からは、縄文人の地域差や早期から晩期に至る時代差の解明、縄文人の起源や現代人との関係といった問題も解明されつつある。最近ではこうした目に見える形態のみならず、骨から抽出されたミトコンドリアDNAから個体間の血縁関係や集団間の系統関係を明らかにしたり、アイソトープから食性を復元する試みなども盛んにおこなわれている。それゆえ人骨は情報の宝庫といわれる所以である

2.新たな民族：渡来系弥生人

時代は変わって、紀元前300年ごろ、あるいはそれよりもう少し前ごろから、大陸方面から西日本に伝えられてきた稲作農業と金属器の文化は急速に東日本にも広がり、人々の生活は大きく変化した。それまで狩猟採集中心の生活を営んでいた縄文時代の人々も、早くから陸稲を細々と栽培していたことがわかっているが、本格的な水田を作って水稲を耕作するようになったのは弥生時代になってからである。この頃、北部九州や山陰地方には縄文人とはまったく異なったタイプの人々が現れた。渡来系弥生人とよばれる人々だ。

渡来系とみられる弥生人の骨が最初にみつかったのは、山口県の日本海に面する土井ヶ浜遺跡である。その容貌は、これまでの縄文人とは似ても似つかぬものであった。頭骨のかたちをみてみると、縄文人とは対称的に、顔の骨は上下に長く、鼻の付け根は縄文人のようにくぼんでおらず、鼻の骨も平べったくなっている。眼球の収まる眼窩は、縄文人のように角張らず円くなっている。渡来系弥生人の顔は、面長でのっぺりとした顔立ちである。まぶたは良く発達していて、目は細く、くちびるも薄く、髭などの体毛も少なかったと想像される。また、口元をみると、縄文人よりも少し前歯が出っ張っているのがわかる。歯が大きいのだ。縄文人はスンダドント型とよばれる小さく単純なかたちの歯をもつのに対して、渡来系弥生人はシノドント型とよばれる大きく複雑なかたちの歯をもっている。からだ全体の大きさやプロポーションも対照的である。渡来系弥生人の平均身長は、男性が164センチ、女性が150cmほどあり、縄文人（男性平均：158cm、女性平均：147cm）よりもかなり高い。からだのプロポーションは、ひじから先の前腕やひざから下のすねの部分が相対的に短く、縄文人よりも胴長短足の体型の持ち主である。このような顔や身体の特徴は、大陸の人々にもみられる。土井ヶ浜遺跡の弥生人が大陸から渡来してきた人々であったことは、ほぼまちがいないであろう。その後、北部九州をはじめ各地の遺跡からも、同じ様なのっぺり顔で高身長の渡来系弥生人が続々とみつかった。

山口県土井ヶ浜遺跡の弥生人



縄文人と渡来系弥生人のプロフィール

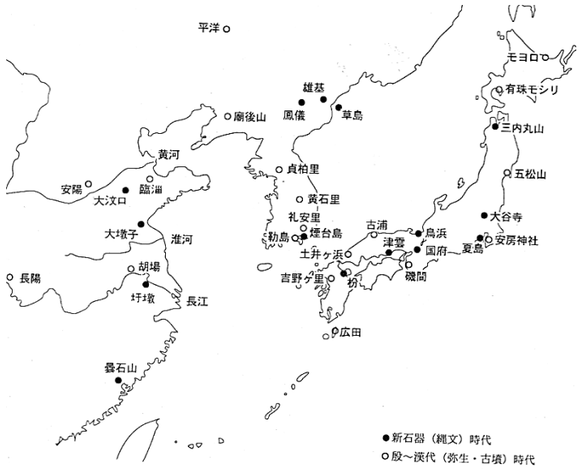
渡来系弥生人の広がり

縄文時代の終わりには、すでに日本にも水田稲作が伝わっていたが、大陸から渡来民が大勢やってくるようになったのは弥生時代の中頃（紀元前後）になってからである。だが弥生時代の遺跡からみつかっている人骨のすべてが、のっぺり顔の渡来系弥生人というわけではない。弥生人の骨がたくさんみつかっている九州でも、渡来系弥生人の骨が埋まっていた遺跡は、福岡平野や佐賀平野など広い平地のあるところ、すなわち水田稲作に適した地域に集中している。九州の西北部、長崎県や五島列島など、稲作にあまり適さない山間部や、伝統的な漁労を続けていたと考えられる海岸部の遺跡からみつかっている弥生人は、縄文人そっくりである。つまり、弥生時代になっても、これらの地域では縄文人の子孫たち、いわゆる在来系弥生人が住み続けていたのだ。

では北部九州や山陰地方に忽然と姿を現した渡来系弥生人は、日本列島の東のほうでは、どこまで広がっていたのであろうか。果たして当時の東日本にも来ていたのであろうか。近畿から東海地方の遺跡からは、わりと保存の良い弥生人の骨がみつかっている。奈良県の唐古・鍵遺跡や愛知県の朝日遺跡などである。これらの遺跡から発見されている人骨はどれも皆、高身長でのっぺり顔の弥生人、すなわち渡来系弥生人である。兵庫県の新方遺跡からは、弥生時代のはじめ頃の人骨がみつかっており、そのタイプは在来系の弥生人であるという。さらに東はというと、弥生人の骨はみつかってはいるのだが、あまり保存は良くない。まともに顔面が残っていない頭骨や、かろうじて歯しか残っていない遺跡がほとんどだ。このような人骨のかけらや歯のかたちから推測すると、少なくとも関東西部の三浦半島のあたりや、長野県にも渡来系弥生人が来ていたらしいことがわかっている。一方、千葉県の房総半島や群馬県や福島県あたりの遺跡からは、わりと保存の良い頭骨がいくつか発見されているが、どれも縄文顔の弥生人、つまり在来系弥生人である。今のところ東北地方からは、弥生人がほとんどみつかっていない。岩手県にあるアバクチ洞穴から、1体の子供の人骨がみつかっているのが唯一の例である。この人骨には縄文人的特徴と渡来系弥生人の特徴が入り混じっているそうだ。北海道からは、噴火湾沿岸の虻田町にある礼文華貝塚に渡来系弥生人の特徴をもつ人骨が1体みつかっている。東北地方や北海道にも数は少ないながらも、渡来系弥生人が来ていたのかもしれない。

渡来民の故郷を中国に求めて

大陸からやって来たと考えられている弥生時代の渡来民のふるさとはどこであったのであろうか。一口に大陸といっても、それは広大である。渡来系弥生人の源流が北東アジアにあったという説もある。なるほど、渡来民が寒冷な気候に適した身体の特徴をもっているという事実は、はるか1万年以上も前にさかのぼれば、シベリアに彼らの祖先がいたことを物語っているのかもしれない。しかしそこは、渡来民にとって遠いふるさとであっても、2、000年ほど前に日本にやって来た彼らの直前の故郷であったとは限らない。寒冷地に適応した北方アジア人は、5000年ほど前には、アジア各地に広まっていたからだ。実は、水稲耕作の発祥の地ともいわれている中国南部こそ渡来民の直接のふるさとだったのでは、という説が最近の調査によって有力となってきた。黄河流域に渡来系弥生人に似た人骨を探しているのが、山口県の土井ヶ浜人類学ミュージアムの松下孝幸らの研究グループである。黄河下流域の山東省の臨涇（りんし）という遺跡からは、漢代（紀元前ー紀元後）のお墓がたくさんみつかっており、埋められていた人々の骨格のかたちは、土井ヵ浜遺跡の弥生人とそっくりという。一方、揚子江下流域の人骨を調査しているのが、九州大学の中橋孝博を中心とする研究グループである。揚州市の胡上（こじょう）から出土している前漢時代の人骨が渡来系弥生人に良く似ているという。また連雲港（れんうんこう）をはじめ山東半島南部からも渡来系弥生人に似た人骨がみつかっている。春秋戦国時代（紀元前771年～）から前漢時代（～紀元後8年）の中国は、政治的に動乱の時代であり、いろいろな民族が入り乱れて戦いあった。日本にやって来た渡来系弥生人は、このような動乱の状態にあった中国から逃れてきたグループなのかもしれない。



日本・朝鮮半島・中国の先史時代・古代遺跡分布図

コラム： 渡来民は何人やってきた？

渡来系と縄文系の人々の人口がひっくり返るほど、日本列島内に渡来民が増えたとしたなら、渡来民は果たして何人くらい大陸から日本にやってきたのであろうか。渡来民は、紀元前3世紀にはじまる弥生時代から古墳時の終わり7世紀頃まで、およそ1、000年ものあいだ日本列島にやって来たと考えられている。縄文時代の終わりの人口は、だいたい10万人くらいといわれている。一方、古墳時代のがおわり頃の人口は、500万人ほどだったことがわかっている。国際日本文化研究センターの埴原和郎の推計によると、この間100万人規模の渡来民がやって来ないと、この間の急激な人口の増加は説明できないという。1、000年間に100万人ということは、年に1、000人ほどの渡来である。この数値が、途方もない数か、妥当な数かは意見がわかれるところである。水田稲作をおこなう彼らは、食料を安定的かつ十分に調達できるので、たくさんの人口を養える。当然人口増加率は高かったであろう。九州大学の中橋孝博や東京大学の青木健ーらの試算によると、それほど大量に渡来民がやって来なくても、つまり最初にやって来た渡来民が少数でも、彼ら自身の人口増加率が極めて高かったなら、縄文系との人口の逆転は簡単に起こりえたという。

では、渡来系の人々の人口が、縄文系の人々よりも多かったとなると、本土日本人は、どのくらいの比率で両者が混血しているとみなせるのであろうか。その比率を推測する手がかりはいくつかある。埴原和郎によると、コンピュータを使って渡来系弥生人と縄文人の頭骨の計測値を7：3の割合で混合させると、関東地方において実際にみつかっている古墳人の頭骨のかたちにもっとも似るという。歯の分析からも、関東地方の古墳人や現代人のおよそ7割の人たちが、渡来民と同じシノドント型であることがわかっている。白血球の血液型といわれるHLA（ヒト白血球抗原）の研究をおこなっている東京大学の徳永勝二は、本土日本人の7割が韓国人と同じ HLA のタイプを持つことを明らかにしている。国立遺伝学研究所の宝来聡によると、ミトコンドリアDNA も本土日本人の 65%の人々が大陸の人々と共通するとのことだ。このような頭骨や歯のかたち、HLA や DNA などの様々な分析結果は、たとえば関東地方の日本人などは、渡来系と縄文系の人々がおよそ7：3くらいの割合の混血によって成り立ったことを暗示している。

コラム：渡来民の顔はなぜ平べったい

それは渡来民の祖先が2万年前の氷河期のまっただ中を生き抜いてきたからにほかならない。人類は熱帯で生まれ、やがて寒冷な気候に適応していった。しかし、シベリアの零下 50 度にもなる厳寒の気候に適応できたのは、わずか2万年ほど前のことである。このような厳寒の気候に曝された人びとは、身体も顔も革新させていった。体温の発散を防ぐために、身体はずんぐりし手足は短くなった。とくに、腕や脚の末端近くが短くなった。顔の凍傷を防ぐために、鼻は低くなり、まぶたは厚く一重になった。眉や髭も少なくなったと考えられている。吐く息が口のまわりに凍り付いて困るからだ。このように本格的な寒冷気候に適応したアジア人を私たちは北方アジア人とよんでいる。やがて、5、000年ほど前、この北方アジア人がシベリアから拡大し始めた。彼らは、中国北部で農耕技術を学び、北東アジアの大部分に広まっていった。かつてはスンダランド由来の人々が住んでいた東アジアの大部分が、後から移住してきた北方アジア人によって奪われてしまったのである。 2、000年前頃には、中国南部の水田稲作技術とともに、ついに日本列島にやってきた。すなわち、彼らこそが、弥生時代を切り開いた渡来民、いわゆる渡来系弥生人だったのである。

コラム： シノドントとスンダドント

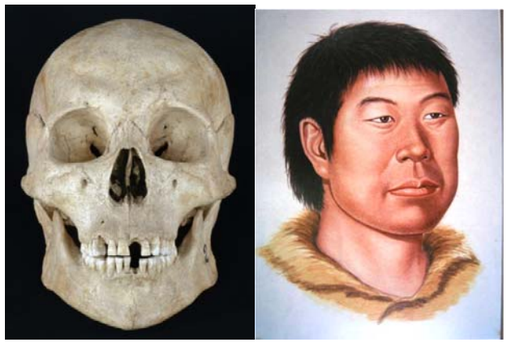
歯は人間の身体のなかでも骨以上に祖先の特徴を良く残しており、人々の起源や成り立ちを明らかにするための有力な手がかりとなる。アリゾナ大学のターナーによると、アジア人たちは大きく2つのタイプの歯をもつグループに分けられるという。日本人や中国人あるいは北東アジア人、さらには遠く離れたアメリカ先住民も、皆お互いによく似た歯のかたちをしている。アメリカ先住民も北東アジア人と同じタイプの歯をもっているということは、彼らの祖先が後期旧石器時代に北東アジアからベーリング海峡を渡ってやってきたことを裏付けている。この人たちの歯は、強く発達したシャベル型切歯など、大きく複雑なかたちをしており、起源が中国北部にあると想定されていることからシノドント（Sinodont）とよばれている(dontは歯という意味)。今から2万年ほど前の寒さの厳しい氷河期を乗り越えてきた人たちの頑丈な歯だ。シノドントの典型は、日本の渡来系弥生人にもみられる。一方、古い時代の東南アジアの人々は、スンダドント（Sundadont）とよばれるタイプの歯をもつ。今から数万年ほど前の氷河期の東南アジアは、海水面が下がってインドネシアやフィリピンなどの島々が大陸と陸続きとなり、スンダランドという大きな陸地をなしていた。スンダドントというのは、まさにこのスンダランドに住んでいた人々がもっていた歯である。スンダランドから渡ってきたと考えられているオーストラリア先住民の歯も、スンダドントの古いかたちを残しているといわれている。縄文人の歯も、どちらかというとスンダドント型に近い。切歯のシャベルが弱く、臼歯の退化も進んだ単純型の歯列を特徴とする。縄文人とオーストラリア先住民は、はるか数万年前までさかのぼればンダランドに住んでいた同じ祖先から分かれたことを、歯は物語っているのかもしれない。ただし縄文人は、北東アジア人ほどではないが、典型的なスンダドントを持つ先史時代の東南アジア人よりも、シャベル型の切歯が多少発達しているなど、シノドントの特徴もわずかながらみられる。後期旧石器時代に北東アジアからシノドントをもつ人々が日本列島にやって来て、多少は混じり合ったのかもしれない。

縄文人と渡来人の上顎の歯列

3.姿を消した北の渡来民：オホーツク人

古代の北海道には、中国や朝鮮半島に由来する渡来民やその子孫はあまり多くはやって来なかったようだが、実は彼らとはまったく異なるタイプの渡来民が北海道にも来ていた。5世紀頃に、稚内から根室にかけてのオホーツク海沿岸に渡来してきたオホーツク文化の人々である。彼らは、先住の縄文系の人々とも渡来系弥生人ともまったく異なった顔をもっていたことは、網走のモヨロ貝塚や稚内の大岬遺跡あるいは礼文島の浜中遺跡をはじめとするオホーツク文化の遺跡からみつかっている人骨から明らかである。面長で鼻の付け根が平べったいという特徴は、北方アジア人の顔そのものである。さらに際だった特徴は、顎がきわめて頑丈で大きいことだ。凍った肉をかじったり、歯で革をなめしたりと、顎や歯を酷使したのであろう。このように大顎で平べったい顔は、ロシアのアムール河流域に住むウリチやナナイといった人々の顔と良く似ているので、オホーツク文化の担い手はアムール河流域からやって来たのではないかと考えられている。彼らはアザラシやオットセイなどの海獣を捕るのを得意とし、あくまでも北海道の北部から東部の海岸地帯にのみ住んでいた。

彼らがやって来たこの時代は、本州では古墳時代から奈良・平安時代であった。北海道では、もともと縄文時代から本州にいたのと同じような縄文人が住んでおり、その後の続縄文時代とよばれる時代を経て、擦文文化という北海道独自の文化が栄えていた。つまり、オホーツク文化の人々がやって来た擦文時代は、北海道の大部分では縄文人由来の土着の人々が住んでいたのである。しばらくは先住の縄文人由来の人々とオホーツク文化の人々は交易などをおこないながら、うまく住み分けていたようである。やがて10世紀をすぎると、擦文文化はアイヌ文化へと発展するとともにアイヌの人々の勢力が強くなり、オホーツク文化の人々は忽然と姿を消してしまった。



稚内市大岬遺跡のオホーツク人

4.日本人・アイヌ・琉球人へ

日本列島に住むわたしたちは、単一民族ではないことは昔から明らかである。アイヌ民族、琉球民族、大和民族で代表されるように、それぞれの民族は長年にわたって独自の誇り高き文化を築き上げてきた。だが、祖先をたどればお互い無関係ではないことがわかる。日本列島に広く分布した縄文人と、現在のわたしたちとは、どのような関係にあるのだろうか。

日本人の二重構造

大陸からの渡来民の流入は、古墳時代の終わり7世紀頃まで続いた。この間、大陸から新しい文化や技術を持ち込んだ渡来民は、しだいに本州を東に進んで近畿地方に進出し、政治的な中心地とした。この頃には、縄文系と渡来系の人々の人口は逆転してしまったようだ。渡来系の人々は近畿地方を拠点として大和朝廷を築き上げ、さらに関東、東北へと先住の縄文系の人々と混血しながら進出していったようである。古墳時代のおわり頃には、このような混血により現在の日本人の原形がほぼできあがったと考えられている。古代東北地方の北部には蝦夷（えみし）とよばれる人々が住んでいた。朝廷の人々は、文化も風貌も異なる彼らを異民族として認識していたようである。蝦夷とよばれた人々の実態は、まさに先住の縄文系の人々だったのかもしれない。

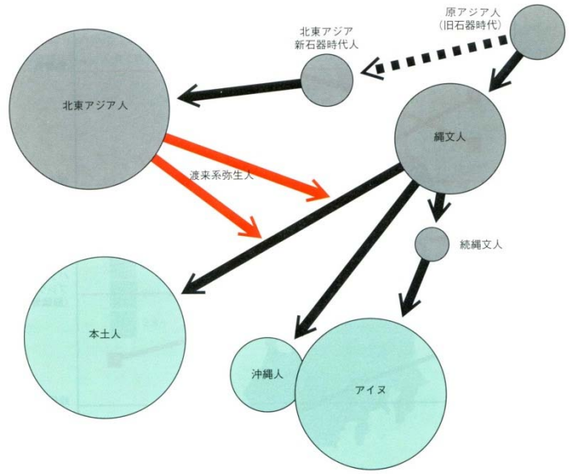
歴史時代になってからも、渡来民の遺伝子は東日本や九州南部へと、日本列島の南北に広まっていったようだ。現在のわたしたちの顔立ちをよくみると、地方によっては面長で平坦な顔から、目鼻立ちがはっきりしている顔など様々なバリエーションがあるのにお気づきであろう。これは先住の縄文系の人々と渡来系の人々の混血の度合いが地域によって異なっているからにほかならない。西日本、特に近畿地方の人々は渡来民の遺伝子を強く受け継いでおり、関東から東北地方に向かって、あるいは九州南部から沖縄に向かって、渡来民の遺伝的な要素が薄まり、縄文人的要素が濃くなっていることが、頭骨や歯あるいは遺伝子など様々なデータから明らかになっている。日本列島の南の端に位置する琉球の人々も、目鼻立ちがはっきりしていてアイヌとどことなく似ているのも、縄文人由来の遺伝子をより濃く残しているからといわれている。このように縄文系の人々をベースに渡来系の人々が、様々な程度に重なり合うことによって、現代のわたしたちが成り立っているという考えは、「二重構造モデル」と呼ばれて人類学者のあいだで知られている。現在では、この「二重構造モデル」が日本人の起源に関する最も有力な仮説となっている。

アイヌと琉球人の由来

古代の技術では水田稲作が不可能であった北海道には、渡来系弥生人はあまりやって来なかったようだ。北海道に住んでいた縄文人の子孫たちは、続縄文時代から擦文時代を経て、渡来系の人々とはあまり混血することなく、自然と共生しながら独自の文化を築き上げていき、アイヌへと移行していったと考えられている。アイヌの祖先が少なくとも縄文時代から住みつつづけていたことは、遺跡からみつかっている古人骨がはっきりと物語っている。北海道からみつかっている続縄文時代（本土では弥生・古墳時代）の人骨のほとんどは、縄文人ゆずりの低く彫りの深い顔立ちだ。このような骨の特徴はアイヌにも引き継がれている。北海道に住むアイヌは、縄文人の遺伝子を最も強く受け継いでいるといえよう。アイヌは渡来民によって北海道に追いやられたのではなく、もともともと北海道に住んでいた先住民なのである。なお最近のミトコンドリア DNA の研究では、オホーツク人との混血も多少なりともあったことが示唆されている。

沖縄に住む人々も琉球王朝に代表されるように、本土とは異なる独自の文化を発展させていった。琉球人も彫りの深い顔立ちをした人が多く、どことなくアイヌに似ていないこともない。このことは、明治時代に日本にやって来たエルウィン・ベルツというドイツ人医師が早くも気づいており、ベルツの「アイヌ・琉球同系論」として知られていた。先に紹介した「二重構造モデル」では、日本の南北両端には渡来民があまりやって来なかったため、縄文系の人々が比較的純粋なかたちで残ったのだとして、「アイヌ・琉球同系論」をうまく説明している。しかし、頭骨を調べている人類学者のなかには、沖縄では本格的な農耕がはじまるグスク時代（12世紀頃以降）から、渡来系の人々との混血が相当に進んでいたとのではないかと主張する研究者もいる。血清タンパクや遺伝子などの分子レベルでみても、琉球の人々がアイヌと密接な関係にあるとする意見もあれば、本土日本人とそう変わらないという見解もある。このように分析対象や方法によって結果が異なっており、「アイヌ・琉球同系論」については、まだまだ論争がつづいているのが現状だ。

縄文人、弥生人、オホーツ人のイラスト
石井礼子氏作



二重構造モデル（埴原和郎氏による）

コラム：日本人の成り立ち ― これまでの論争

日本人の成り立ちについては、今にいたるまで100年近くも論争されてきた、いわば古くて新しい問題でもある。最初に口火を切ったのは、モース、シーボルト、ベルツなど、幕末から明治の初めに来日した外国人である。シーボルトは、日本の先住民はアイヌであるとする「アイヌ説」を主張した。それに対して、モースは大森貝塚で発掘した人骨や土器などを調べ、石器時代人はアイヌと関係のない人たちと考え、「プレ・アイヌ説」を唱えた。ベルツは本土日本人が均質な集団ではないことに気付き、長州型と称する中国・朝鮮などの大陸由来の要素と、薩摩型と称するマレー系の要素をもつ人たちが混在していると指摘した。「アイヌ・琉球人同系論」を唱えたのも彼である。その後、「アイヌ説」は東京大学の小金井良精に引き継がれた。一方、モースの「プレ・アイヌ説」は、東京大学の坪井正五郎によって引き継がれ、「コロボックル説」として生まれ変わった。坪井の考えは、プレ・アイヌというのはアイヌの伝承にたびたび登場するコロボックルだという。アイヌ・コロボックル論争は長い間続いたが、物証の乏しさから「コロボックル説」は消滅した。つづいて、大正から昭和にかけて次々と新たな説が登場した。京都大学の清野謙次による「原日本人説」と、東北大学の長谷部言人や東京大学の鈴木　尚による「変形説」、そして九州大学の金関丈夫の「渡来説」である。清野の考えは、アイヌも日本人も、石器時代（縄文時代）にいた「原日本人」とでも称すべき人々が、それぞれ近隣の大陸由来の民族との混血することによって成り立ったというものであり、この考えは「混血説」ともいえる。対して「変形説」は、縄文人とその後の日本人の骨格の違いは生活環境の変化によって生じたのであり、日本人は他の民族ともほとんど混血することなく純血をたもってきたという考えである。一方、土井ヶ浜遺跡から渡来系弥生人の骨を発見した金関は、少なくとも西日本の日本人は渡来民の遺伝的影響を相当に受けているとみなし、「渡来説」を主張したのである。その後、国立科学博物館の山口　敏らの古墳人の研究により、渡来民の影響は東日本まで及んでいることが明らかにされ、東京大学の尾本恵市らによる遺伝学的な研究からも「混血説」が有力となってきた。平成になると、東北大学の百々幸雄など、渡来民の遺伝的影響は想像以上に大きいのではないかといった「渡来説」に近い見解もでてきた。現代日本人の頭骨のかたちの地域差を詳しく分析した国際日本文化研究センターの埴原和郎は、これまでの諸説は相対立するものでなく、西日本では「渡来説」、東日本では「混血説」、日本列島の両端では「変形説」がそれぞれある程度当てはまると考え、従来の諸説を統合した「二重構造モデル」を唱えた。

参考文献

中橋孝博　日本人の起源　講談社選書メチエ
池田次郎　日本人のきた道　朝日選書
山口　敏　日本人の生い立ち―自然人類学の視点から　みすず書房